

昭和生まれのあなたが、ミックスCDなんていう、ひと世代前の、時代がかったこと（と書くとき、あなたは気分を害するのかもしれないけれど）を平成生まれのわたしに（「きつと氣にいるから」と）くれるものだから、わたしもそれに倣って、便箋なんていう、ひとつかふたつ世代前の、時代がかったものを使って手紙を書いています。令和元年の今、もちろん手書きで。

わたしは、あなたも知っている通りちょっと頑固なところがあるので、この手紙は最初から最後まで字をまちがわずに書くことと決め、字をまちがうたびに新しい便箋に書いているので、もうだいぶ字もきれいになってきているし、書くことに迷いもありません。むしろ今となっては、あなたに何かを伝えたいというよりも、ノーマスでこの手紙を書ききってみたいという意志のほうが大きいかもしれません。

はじめて会った時、あなたがわたしにミックスCDをくれたのがきつと気まぐれだったように、わたしがこの手紙をあなたに渡すかどうか、きつと気まぐれになるのだと思います。（もし、ぜつたいに渡そうと思っていたら、たぶん書き始められてないなと思う。）

しつていますか、フランス革命は、カフェから始まったそうです。

「きつと氣にいるよ」とあなたがカフェで差し出したCD-R、しつかりデザインされた手作りジャケット付きのそれは、ストリーミング世代のわたしには輝いて見えました。

あなたは「たぶん好きな曲ばかりだと思うから」と言ったのをおぼえていますか。その言葉通り、裏面に書かれた曲目は見ているだけでわくわくしてしまうような並び。わたしは急いで家に帰って真っ先にパソコンを立ち上げ、そのCD-Rを入れて、わくわくを見失わないようにした。再生しなまず聴こえてきたのはTempalayの『革命前夜』でした。

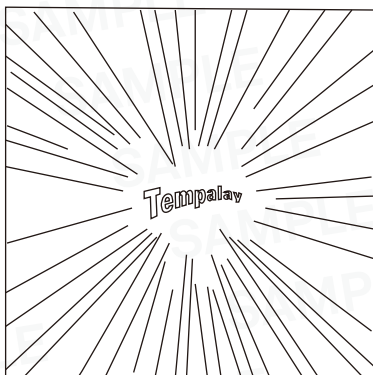
力強いビートと、カウントダウン……わたしはそのイントロを知っていました。なるほど、あなたは確かにわたしの好みを完璧にわかっているみたいだけど、ストリーミング世代であるわたしの、音楽を知る速さを追い越すことはできなかったみたい。

でも、そのミックスCDから聴こえてくる『革命前夜』は、わたしがWi-Fi環境のもとで聴く『革命前夜』とは何かが、うまく説明はできないけれど、何かが違って聴こえて、ドキドキした。

この手紙を書きはじめた時には「ミックスCDよかったです。ありがとう」的なことを書こうかな、と思っていたのですが、もう違いますね。だつて何を隠そうCDのお札を言うにはあなたにはじめて会った日から時がだいぶ経ってしまったし、第一、CDのお札なら口頭ですでに言っているわけなので。だからわたしが書きたいのは、あなたがわたしに革命を起してくれたことなのです。

あなたと知り合つて、わたしの目線はあきらかに出会う前よりも遠くへと定まりました。背伸びをしてちょっと遠くをみるだけでなく、できればそこへ行つてみたい。できるだけ早く、駆け足で行きたい。じゃないとあなたには追いつけそうにない。あなたはいつもわたしに背中しか見せてくれませんよね。それがなんだか潔く、悔しく、そして好きです。

しつていますか、人が生まれてくるのは、恋と革命のためなんだそうです。わたしは今、それを信じてもいい気がしていますが、この手紙は、書けば書くほどラブレターであることが隠せなくなつ



Tempalay

「革命前夜」

from from JAPAN 2 (2017)

ロマンチックなムードの中に漂う、終わり始まりの予感。ここにいる自分が明確に感じる高揚、同時に、夢の中にあるような浮遊感。揺るぎないアンセムでありながら、聞く場所、時間、気分によって聞こえ方が全然違ってくる掴みどころのなさも魅力的で、わたしは今日も、取り憑かれたように再生ボタンを押してしまう。どうしようもなく、惹かれてしまう。『今夜はブギー・バック』のような曲を目指して作った、という小原綾斗 (Gt,Vo) の言葉にも納得の、文句なし・新世代のキラークラウン。

て、どうしようかなとわたしを困らせます。一番重要で恥ずかしいことを言ってしまったのでもうすぐ書き終わるわけですが、この手紙をあなたに渡すかどうかは、もっと何か別の力のはたらき（運命とか）が必要そうです。

でも、そうですね……幸か不幸かそんな力のはたらきがわたし的人生に起こって、あるいは、わたしの足がどんどん速くなってあなたに追いついて、この手紙が渡せたときのために、歴史上のあらゆる革命の伝統に倣って、これだけは書いておきたい。

この手紙はあなたへの宣戦布告および革命宣言である。

平成生まれより愛を込めて。